

三保通信

23.5.1

〒424-0401

(株) 三保製薬研究所
静岡市清水区中河内一五二三
☎054-396-3321

コロナ著作『無病法』(中倉玄喜編訳・PHP)の目次冒頭に書かれている「はしがき」、つまり著作のペーじ1にこのようにある。

「わたしはこれまで、老年と

いうものがこれほど素晴らしいものとは知らなかった」と。

「老年」が素晴らしい、と、どうしたら老年が素晴らしいなんて思えるのだろうか。あつちが痛い、こつちが痛いと言いながら老年が素晴らしいなんて思えるだろうか。夢や希望を持ってればと思っても、あつちが痛いこつちが痛い、気も弱くなつたし、とそのままでは老年が素晴らしいなんて思えないのではないだろうか。

月曜日の病院外来で、重苦しくも待ちかねたように受診の順番を待つ

花見にとつて

「老年というものがこれほど素晴らしいもの、つて、それ当て付け?!」と、少し自虐的?な花見なのだが、およそ世間さまは花見の気持ち「よくわかるよ」と仰るのではないだろうか。

花見氏 『ルイジ・コロナ』

を読む

「私と同じように、幸せな人生を、そのためにこそ、」

高齢化社会の「先行き」が話題にならない日は無い、というくらいに実はその話題には憂鬱さが目立つ。高齢になつてからでは本当は遅い、若い人たちが考えるようになった時、勿論自分ごととして、その対策は具体化するのかもしれない。

著作講話(一)でコロナは語る。

「気分はいつも陽気で、心が曇るようなことは一時もない。生への倦怠や生活の疲労など、私にはまったく無縁である。一日の内かなりの時間を見識ゆたかな人々との間の楽しい会話で過ごし、それ以外のときには、良書を友としている。そして読書を味わった後は、ペンをとっている。執筆こそ世の中にもっとも役に立つことだと思っているからである。」

この様に語るコロナだが、何も老年だけの、いや老年にそうなるためには若い時から、その希望や夢を語り実践して成し遂げられるのではないだろうか。花見は言う、「何(なに)言ってるんだろわかねえ、みんな気がついた時には遅いってこと。人生はそんなに時間は無いよ。」と。しかし「老年というものがこれほど素晴らしい、」と感ずるために人生はあるのでは、。

(H)

「絵のこころ」(五)

「創造」の泉

前回の三保通信・山田整骨院だよりの『96歳クラブを発足させます』の欄に、思わず目を惹きつけられました。「96歳」は健やかに若い、旅立っていった私の母の生きた歳月でもあります。更に掲(かか)げられていた『方法』のなかの「11. 思い悩まない」が、ポジティブな姿勢で日常を過ごしていた母の姿と重なり、改めて前向きに晴朗な心持ちを抱けることの大切さを再認識する思いでした。年月の長さは兎も角、自身の「生」をその人らしく生きることが、生命(いのち)を授かった身として誰もが望みたいことでしょう。「96歳クラブ」に触発され、今回は90代半ばに達する今も創造の泉を潤し、耕し続けている二人のアーティストへの想いを巡

らせたいと思います。(昨年の体験記として綴らせて頂きます。)

足の怪我による長い病棟での日々、A氏はリハビリ室に並んでいた本を借りて読んでいた。退院した患者さん達が置いていかれた書籍とのことで、医療関係、小説、ミステリーものなど多岐にわたっていた…。

その中で、ひととき大きく、目をひいた立派な装丁の一冊が「影絵と文」藤城清治の『アッシジの聖フランチェスコ』だった。

ズシリと重い、画集のように美しい本で、出版元は病院の近く(赤坂)に修道院がある「女子パウロ会」と記されていた。入院なされていたシスターが寄贈なされたものらしい。

独り、閉ざされた病院のベッドの上で頁を開くと、一挙に呼吸する大気は国境を越えて、アッシジの光景にきらめく色彩、澄みきった天空へと啓(ひら)かれていった。「影絵」はイマ

ジネーションを無限に羽ばたかせる…。2016年刊行のこの作品は、藤城氏が「21年の歳月をかけた渾身の作」とのことで、現地アッシジに赴(おもむ)いてデッサンに勤しむ氏の姿の写真が末尾に載っていた。当時画伯は80歳! 豊かな創作力を育む強靱な情熱に胸を打たれた。

今も、新しい作品を生み出し続けているF氏。98歳を迎えられた時のメッセージがSNSに掲載されていた。『世界が大きく揺れる今こそ作品を通して皆様に光をお届けしたい。』

季節は巡り、退院後日常を取り戻し始めていた初秋、A氏の身に思いがけない幸運が舞い込んできた。



コロナ禍で自粛モードの厳しい時勢の中、最も尊敬し、敬愛しているヘルベルト・ブロムシュテット氏の指揮によるNHK交響楽団のコンサートへのお誘い…… 夢見心地でA氏は十月のその日を迎えた。

ブロムシュテット氏は1927年生まれ。ドレスデン・シュターツカペレなどの黄金時代を築き、著名な各オーケストラの首席指揮者として卓越した活躍を展開し続けている。N響とも、1981年の初共演以来数多くの名演奏を生み出し、日本でもファン達を魅了し続けている音楽家である。

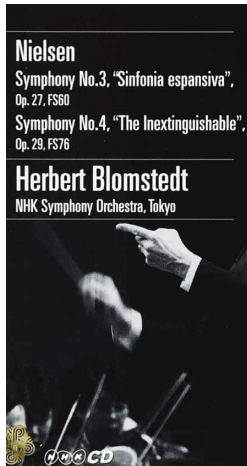
当夜のプログラムは、シューベルトの交響曲第一番と第六番であった。マエストロ・ブロムシュテットの背中が微（かす）かに揺れ、右腕が拳がると同時に滑り出すように、つややかなオーケストラの響きが流れ出る……

弦楽器の美しい旋律に、冴え渡る音色（ねいろ）の管楽器が調和し、テーマが心

地良いリズムを誘いながら展開していく……。「デビュー作」に相応（ふさわ）しいB.氏の瑞々（みずみず）しい演奏に、裸の魂そのものが包み込まれているのであった。続けて演奏された第六番。シューベルトの内的感覚の再現が色濃く燦（きら）めき、悲しい程に美しい旋律とハーモニーが渦巻き高揚してゆく……。

「人はコンナニモやさしく、美しいモノ……」 涙で滲（にじ）むマエストロの姿を追いながら、豊饒な陶酔の時空で癒（なご）まれていた。

いつしかステージとひとつになつていたホール内には躍動感と高められた生命力が漲（みなぎ）り、そこにはシューベルトの「精髓」も織り込まれ、当時のウィーンの空気が混じり合つてい



るのを確かにその気配を体感しながら、遠い過去が今と、更に未来へと融合し、非日常の純粹な「時間」へと誘（いざな）われているのであった……。人の、アートの力は深く、はかりしれない……。

以前N響の楽員のひとりが、演奏会直前に用事があり、B.氏の楽屋を訪ねたところ、熱心に譜面と対峙し探求している氏の姿に胸を打たれたというエピソードを聞いたことがあった。数えきれない程の回数を重ねた「十八番（おはこ）の作品」でも、楽譜を研究し続ける大家の姿勢に、若き楽団員達は驚嘆したのであった。

「楽譜から、作曲者の意図を、その思いを読みとり、掬（すく）い取ることが私の使命……。新たな発見がある。」との意味のコメントをTVのインタビューで語っていたマエストロ。

常に新たな感動を齎（もたら）す演奏に、永遠的な新しさ、【普遍性】が息づいている所以（ゆえん）ではないだろうか……。

最後にもうひとこと、ブロムシユテツト氏の言葉を紹介させて頂きます。「肖像写真集」の「木之下晃・飛鳥新社」のポートレートに添えられたコメントです。

『私は生涯肉食をしない。誰だって、友達を食べるのは嫌だろう。』(彼は、音楽界では珍しい徹底した菜食主義者として知られている。)

皆様が、心優しいマエストロを身近に感じ、愛好する音楽とのより魅力的な交感を楽しめますことを祈念致します。 ─二人の英雄への限りない敬意と感謝と共に。 ─



思いのままに 信州から

看護師 工藤美智子

春

四月初旬、佐久平の山々は、息を吹き返します。茶色の山肌に、白い丸

い、大きな点々のように、ユブシの花が満開になります。モクレンに、花の形は似ていますが、真っ白です。(モクレン科) 見つけると、一番に、「春が来た!!」と思います。そして、次々に花が咲きます。タンポポの黄色、オオイヌのふぐりの青、田んぼの土手は、野草でいっぱいになります。

今日は、野菜の苗を買って来ました。ナス、キュウリ、トマト、セロリ、レタス。庭の畑に植えます。ジャガイモも植えます。畑の脇には、アズノ木があります。オレンジ色の、梅と同じ位の大きさの、果物です。信州の特産かな? 大好きなので、庭に植えてあります。実りの時期が楽しみです。自然の恵みを、沢山もらっています。



老いる団地 認知症ゼミ

高齢者らが「ゼミ生」になり、取り上げるテーマは認知症の枠組みを超えて自分のエンディングをどう考えるか、(毎日 331)

「参加した皆さんが互いに不安を分かち合えた意味は大きい。仲間の力を感じました」、ともありました。「ゼミ生」とは確かに都会ならではの高齢者生だと思えます。ただし、「認知症」については都会だけのことではないと思えます。「ゼミ生」の広がりを願うものです。

ただし、「認知症ゼミナール」が「健康ゼミナール」になつていくことを期待したいと思えます。そして高齢者らの「ゼミ生」から中年の「ゼミ生」、さらに青年の「ゼミ生」になることを期待したいです。いずれも、「不安を分かち合う、」から「希望を分かち合う」運営に進まれることを期待して止みません。

(H)

Hのひとり言…

「オシケオップ考」について



「ひとり言」の本題に入る前に一つ余談を、と思ったしだいです。インターネットのGoogle検索で「オシケオップ」を調べてみましたら「3月1日号三保通信掲載のお知らせ」と、そしてその一件だけが検索されました。オシケオップは三保通信3月1日号にありますよ、とあるのです。インターネット世界のスゴさといえますか、でも考えてみますと三保通信に書かせて頂いた「オシケオップ考」のオシケオップが耳慣れない

言語だからなのか、一方で言葉の価値を良く善く「熟〈考〉」しなくてはと、少しヒヤツとしたしだいです。

「オシケオップ」は弊社前号の3月1日号でご紹介申し上げておりました、友人の石原修さんの〈便り〉「オシケオップアイヌ(S&S)(会誌)『ウレシパ・チャランケ』に掲載中)にあるのです。

弊社今号にも『腹の健康』西勝造』を連載中ですが、「腹」には誠に縁が深く、仕事のテーマでもあります。それで石原さんのオシケオップにどうしても目が行くわけです。

ただし石原さんのオシケオップは日本語・和語で「はらわた」(「こころ」)なのです。私も腹は肚ではないかと、からだの土壌ではないかと普段より書かせて頂いています。石原さんのそれは「はらわたでありこころ」なのです。そして石原さんのその「はらわたのこころ」は「文化、アイデンティティ、暮らし、健康、安全(差別・ヘイトのない)及び司法という概念に基

づいた権利を回復し保護し進める責任」(オシケオップ(S&S)なのですね。

私は、もともと卑近な話をしていくのかもしれませんが、「お腹の気持ち良さをご自分のお腹で知って頂きたい」と。身近なこと、あらためて申し上げなくても分かっておられるのかもしれませんが、これも思うのです。腹が身近すぎて、自分の付属物くらいに思っ、自分とハラ腸を分離できないのでは、と。

「はらはら」ですよと言いたいです。そして本人の自分しか(気持ち良いおなか)は自覚できないのですね。

石原さんも、「こころの中にアイデンティティを入れていましたが、これをGoogleで調べてみますと、

「自分の価値を他者に認められること」とありました。腸の存在を無視して食欲に走る、こと、「オレはお前のモノではないぞ」という、ハラワタからの声、他者からの声なのかもしれません。

(H)

『腹の健康』第六章宿便保留
―慢性便秘とその結果―

『月刊西医学』1981.3月号再掲載からの転載です。尚、前回の「腹の健康」(3.1号)では1981.2月号再掲載としてしまいました。3月号が正しく、ここにお詫び申し上げます。(H)

腹の健康

西勝造

人体の各部は、調和して活動しなければならぬ。そして、一部門に故障が起こるや、必ず他の器官や、組織も、その影響を感じるに相違ないのである。

もし人が、便秘患者となるならば、脳(それは腸神経を通じて充血を通

日本のゴーギャン・田中一村の最高傑作「アダンンの海辺」市内で20年ぶり公開 栃木市立美術館(電0282(25)5300)で企画展

2023年3月26日 東京新聞
開館記念展は六月十八日まで。一村作品は「榕樹(ようじゆ)に虎みづく」など計六作品。



田中一村については弊紙でも何度か紹介させて頂いています、お近くのらと…一村専門館は奄美ですが。(H)

あとがき

今回は「老年」の話題が多い号でした。

「人生最高の時」と言える老年を過ごしたいですね。(Y)

知されるのである)は、胃袋に命令を發して腸内に新しい物質を入れる余地が生ずるまでは、食物を送つてはならないと報道する。

諸氏は胃袋からの食物は、幽門を経て十二指腸に至り、十二指腸は又、小腸の最初の部分であるという事にお気づきの事と思う。胃の中に食物が、先へ進まずして停滞していると、それは酸っぱくなり腐敗し始める。

それ故に患者は、風氣(かざけ)、少し風邪をひいた感じ)や、胃酸過多、胸やけ心悸昂進、頭痛等を訴えるに至る。実際消化不良から發する症状の数は無限である。これらの症状を、あたかも疾病であるかのよう

に、とり扱う事は、明らかに愚かな事である。

記憶せねばならぬも一つの重要点は、腸内における腐敗菌は、胃へと進み、かくしてこの重要器官を、汚水溜りと化する事である。腸の下部の沈滞状態はいかに不消化を引き起こすかを知る時に、単に胃にのみ対して医学の最善を尽くしたところで、何ら得るものではないということが分かるであろう。

必要な事は、便秘を治す真面目な努力である。それには、あまり沢山食事を摂らないようにせねばならぬ。適当な食物を摂らなければならぬ。胃の内容を過度に、膨化させるのをさげねばならぬ。食後は休まなければならぬ。消化作用を妨げるような興奮状態や、激動状態をさげねばならぬ。胃の繊細な裡面(りめん)を害するような食物や薬剤はさげなければならぬ。

ゆみごん4コマは掲載をお休みさせて頂きます。(H)